

## [011] 奥田八二日記研究会会報表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/7148408>

---

出版情報：奥田八二日記研究会会報. 11, 2023-09-30. 奥田八二日記研究会(九州大学大学文書館内)  
バージョン：  
権利関係：

## 奥田幸夫人を偲ぶ

奥田八二先生の闘いを支えられ人生を共にされた奥田幸夫人は、去る 2023 年 5 月 13 日、その生涯 (享年 99 歳) を全うされました。訃報に接したとき、奥田先生につながる最も大切なものを全て失くしてしまったごとく万感胸に迫り、深い悲しみと寂しさがこみ上げてくるのを禁じ得ませんでした。

学生時代に先生ご夫妻から頂いた温かいご指導の数々を思い出し、奥様のお元気なうちに、温顔に接する機会をもっといただいて感謝の気持ちを直接お伝えしたかったと後悔の念にかられます。

生涯の師と仰いだ奥田先生の研究会は、筆者が法学部 2 年の春 (1961 年) から大学院修士修了 (1966 年)、そしてその後 1 年岡山大助手として九大院での研究継続を与えられた春 (1967 年) まで、足掛け 7 年の間、毎週、それを生きがいとして通いました。

研究会の場所は、初め福岡市天神の某寺院の一室を借りていましたが、後に千代町の先生の書齋に移ってからは、午後 6 時から 9 時ときには 10 時頃まで行われました。なので、先生ご夫妻が郷里の相生に帰省されたときなど、奥様が「赤穂の塩見饅頭です」といって研究会にお顔をお見せになり、先生のご家庭の雰囲気にも接することができるようになったのです。

なかでも思い出深いのは、毎年の研究会忘年会で、安い会費で飲めるように先生のお宅を会場にさせていただいて、それに奥様が少しでも新鮮で安い食材を一軒一軒まわって買いだしてくださったことです。私たちは、奥様の籠をもって、千代町商店街の狭い路地をめぐり、白菜や春菊はこちら、焼き豆腐やこんにゃくはあちら、すき焼き肉は少し遠いけど向こうの店がいいわという奥様の説明を聞いていました。重い籠を抱えて歩き回ったのですが、幸せな充実した時間だったことを記憶しています。

この研究会のほかにも、ご自宅をお伺いして、先生の新聞切り抜きの整理やソヴィエト訪問の際に先生が撮影された 8 ミリフィルムの編集をお手伝いしたことなどがありました。そのときにも労いの言葉を奥様からいただいて、いつも作業に集中できるように配慮されていたことを思い出します。研究会の指導だけではなく、奥田先生は困っている学生の面倒をよく見ておられました。時には心病む青年をご自宅に呼び寄せて面倒を見ておられ、筆者も奥田先生宅にお邪魔している同じ書生同士として青年とお付き合いしました。そんなとき青年の食事などの世話は、もちろん奥様が引き受けておられたのです。

しかし、その頃からすでに、奥田先生の仕事量が並々ならぬことは、私たち学生にも薄々

感じられました。先生の過密スケジュールは、恐らく私たちの想像を超える激しさでした。講義の合間に全国を飛び回って講演。執筆の時間が確保できれば、1時間に200字詰め原稿用紙6枚のペースで書き上げ、5時間でペラ30枚の原稿を完成される。ワープロもパソコンも無い時代に全て手書きで書かれた原稿は美しい筆跡で、推敲も清書も必要なく、そのまま完成稿として印刷に付されました。こうして講義、講演、大学内外の各種の会議、研究・調査に奔走して、帰宅する時間はまちまちとなり、奥様が先生の健康管理にいかにか心を砕かれていたかは想像に難くありません。

奥様は、その頃のことを「夜がおそいし、日曜日でも留守がちなので、子供にもさみしい思いをさせたと思います。また夕食をするのかしないのかもわからない日が多く、深夜に食事の支度をしなければならぬ腹立たしさも幾度かありましたが、今では飼い馴らされて、こちらも対応のコツを覚え、あまり争うこともなくなりました。」(『大いなる人間模様—奥田八二先生還暦記念文集』1980年、46頁)と漏らされています。

そして、奥田先生が、学生部長や教養部長時代になると、「人様が思われる程心配はしませんでしたでしたが何度か登校途中の学生活動家の待ち伏せを案じて学校までついて行ったりもしました。かれらとの対決にも最前線に出るので、眼鏡がこわれたり、洋服のボタンがちぎれたり、生傷も度々でした。それでも私は、事なかれで何もしない人の多い中で、そんな夫の勇気ある行動を誇りに思っています。教養部長になってすぐビラ剥ぎ作戦を強行した時期がありました。その時は『部長が先頭に立たなければ人はついて来ない』と真冬の夜中でも学校からの、学生がビラを貼っているとの電話にとび起きて駆けつける姿に何度か頭が下がりました。が本人はさほど苦しんでいる様子もなく、むしろ楽しんでいる様にさえ思えるときもありました。」(同、49頁)と語っておられます。何事にも動じない奥様のこのような支えもあって、奥田先生の頑張りがあったに違いないのです。

最後に私事になりますが、世間知らずの筆者は、超多忙な先生に、結婚式の相談をいたしました。宮崎県の南端の田舎まで御足をわざわざ急行と鈍行を乗り継いでお出でいただいたのです。先生は半分冗談のように「僕は行こうかどうか迷ったけど、妻が、何を迷っているんですか、あんなに世話になったのに、と言うから、来たよ。」と。先生のお言葉を聴きながら、奥様の日頃のさりげない労いの言葉が思い出され、そのときも奥様と先生の麗しい二人三脚ぶりを垣間見た想いでした。

学生時代とその直後の頃の奥様を偲び、思い出すままに書いてまいりましたが、奥様の最晩年に、筆者は、奥田先生の学恩に感謝しご霊前に捧げることを念願して小著を纏めました。奥様にはご迷惑であったかもしれませんが、その時以来、直筆の年賀状をいただくようになりました。ご高齢のためか震える筆跡で「お体をお大事に」と書き添えて下ったのが、最後の御賀状になりましたが、筆者にとってかけがえのない座右の文となっています。

末筆ながら、右も左も分からなかった学部生の頃から、生涯、実の父母のごとく親身にご

指導いただいたお姿を偲びつつ、ここに深甚の謝意を表し、謹んでご冥福をお祈り申し上げる次第です。

奥田八二日記研究会  
顧問 河野 正輝